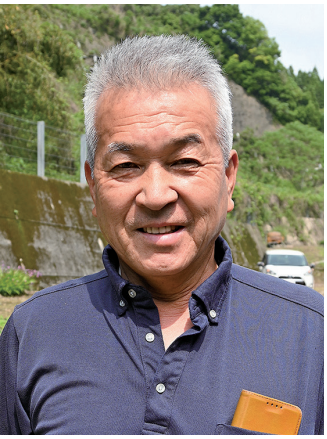
川内田（かわうちだ）

朝来山の谷間に広がる川内田地区（福原）を訪ねました。郷愁を感じさせる風景に、心が洗われます。あちらこちらを歩きながら、人の優しさが伝わる笑顔にいくつも出合いました。


どんどやの話などを教えてくれた、区長の牧村さん

川内田の東から見た赤井川の流れ。春は桜の名所です

日常の喧噪（けんそう）から解き放たれて

のどかな里山の景色を映す川内田地区。日常の喧噪から解き放たれたこの場所は、空気の透明度が違います。聞こえてくるのは人の営みの音と鳥の声。田んぼでは田植えの準備が始まっています。地区を貫く赤井川の水を引いた川内田の米作りは昔から評判です。

その日の赤井川の流れはゆるやかでしたが、先の豪雨による災害で現在、内寺地区から続く道路は復旧工事中です。そこで今回は、柳水（やながみず）方面から向かいました。

ここに35軒が暮らしています。「昔は80数軒ほどあり、炭焼きをなりわいに暮らしていました。高齢者が多い地区になったけど、若い人たちに支えられています」と話すのは、区長の牧村俊一（まきむらしゅんいち）さんです。

川内田の一大行事が1月に開催される「どんどや」。毎年盛大に行われ、離れて暮らす家族たちも帰省し、にぎやかさを取り戻します。「どんどやの準備は早かですよぉ。2カ月前の11月頃から、せん定した栗の木などの廃材を集めておくとです」と牧村さん。笑顔が集うイベントへの、待ち遠しさが伝わるようです。

田んぼが耕され、田植えの準備が進んでいます

毎年1月に開かれるどんどや。たくさんの人でにぎわうそうです（写真提供＝牧村さん）

「みついのおっちゃん」元気です

川内田で長年、日用品や雑貨を取り扱ってきた三井商店。地域の子どもたちから「みついのおっちゃん」と親しまれてきた2代目店主の三井（みつい）善行（よしゆき）さんは「私で50年ほど商売させてもろたばってん、9年前に閉めました。もう年だけんね」と話します。

現在のみついのおっちゃんの楽しみは野菜や果物作り。「イチゴはもう終わり。今年はジャムばたくさん作ったねぇ。次はそろそろ、ビワがおいしゅうなるもんな」と袋がけの中身を見せてくれたかと思うと、立ち話もそこそこ